

枕草子 清少納言の魅力

作家の田辺聖子さんが、清少納言は「石女（うまずめ）」だったのではないかと「文車日記」の中で書いています。いささか人権無視の用語ですが、要するに子供の産めない人だったであろうということです。

枕草子第一四六段「うつくしきもの」をとらえての見解です。「うつくしきもの」とは「かわいらしきもの」の意味。

「うつくしきもの、瓜にかきたるらごのかほ。雀の子の鼠鳴きするにどどり来る。二つ三つばかりなるらごのいそぎてはひ来る道に、いと小さき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとどかしげなる指にとらへて大人などに見せたる……」

この辺りのくだりになると本当にかわいらしい。田辺さんは現実には子供を持ってばこうまでその愛らしさを描写できないのではないかということです。

「子供のいやらしさやにくらしさも表現しているけれど、それは、辛辣で、とても子供を持っている親ののめり込んでいくようなあいまいさ

からみつくような一体感がなく、まるで男性のもの」と分析するのです。

清少納言には本当に子供がいなかったのでしょうか。からみつくような一体感と表現された内容の実感が私にはありませんが、この段の子どものかわいらしさはよくわかります。

二つ三つというのは数え年ですので、一歳か二歳、はいはいしてくる様がかわいらしいのに、その小さな指で小さなちりを見つけて、ことばもたどどしく、大人に見せるのです。

枕草子は随筆ですけど、これほどに写真でさるものかと感心してしまうのです。

清少納言とはどういう人だったのでしょうか。

でも、枕の草子の作者といえ、清少納言と返ってきますが、これも定かではありません。古典の世界では、作者と原本が必ずしも一致しないのです。ひよつとすると枕草子は後年書き足しがあったかもしれない。それも分かりません。

話を戻します。清少納言は学者であり歌人でもあった清原元輔の娘として生まれています。その清原の一字をとって清少納言と名付けたようです。清原家は学問に優れた家系で、自身も才能に恵まれ、理的で明るい性格であったといえます。

最近の研究で清少納言は三十歳頃に離婚したと言われていますが、相手は、橘則光。今昔物語に名前が見える人です。則光は頭がよく、腕力にもすぐれていました。『今昔物語』には、則光がある夜一人で三人の男を斬り殺したという話があります。才女と豪傑の夫婦はうまくいかなかったというところでしょうか。その後、一

条天皇の中宮定子に仕えています。ここでも結果的には不遇の生活を送ります。

女流二大作家の一人と言われる紫式部の仕えた彰子は、皇子を生み父藤原道長の後ろ立てで華やかな生活を送っていました。一方、清少納言の仕えた定子は、父道隆が病死し、二四歳の若さで亡くなってしまうのです。その後、清少納言は宮中を退き、摂津守藤原棟世と再婚して平凡な受領の妻の生活に戻りました。棟世との間にできた娘「こま」は上東門院に仕えました。

この上東門院とは、清少納言のライバル紫式部が仕えた彰子のことです。人間の運命とは不思議なものです。

はしたなきもの　こと人をよぶに、われざとてさし出たる。物などとらするをりはいと。

とのづから人の上などうらいひ、そしりたるに、とさなき子共の聞、とりて、その人のあるにいひ出たる。

誰かが私を呼んでいる。「はい」と答えたら他の人と呼んでいた。これあげるね、といわれて手を出したら、他の人にやろうとしていた。人の悪口を言っていたら、子どもが聞いていてその人に言ってしまった。こんな経験が皆さんにもあるでしょう。「あー恥ずかしい。」「そそ、それは……」その恥ずかしさや狼狽した心理を見事に描写しています。清少納言の不遇の人生。その中で磨かれた感性だと思えてならないのです。